

H・V・シーボルトと関西大学博物館所蔵資料

— 日本考古学黎明期の一断面 —

徳田 誠志

一 はじめに

筆者は本誌前号までに、関西大学博物館が所蔵する遺物についての学史的な位置付けを試みてきた。その結果、所蔵品のなかに江戸時代中期の弄石家として著名な木内石亭、木村兼葭堂らの旧蔵品が含まれていることを指摘した。これらの遺物は当時の凶譜にも掲載され、江戸時代の「好古学」においても、大いに興味を引いたようである。^①

また、その頃に、弄石家の収集欲を満足させるために製作されたと思われる石製品の贋作が、今日まで伝えられていることも指摘してきた。これらの贋作は、今日の考古学資料としては意味のないものであるが、学史の中に存在価値を見出すことは可能であろうことを述べた。^②

今回は、明治初期に活躍した一人の外国人考古学者に焦点を当て、彼の著作に掲載されている資料が、関西大学博物館に所蔵されていることを明らかにしていく。

その外国人とはH・V・シーボルトその人であり、彼と本学コレクションの基礎を築いた神田孝平との交流、あるいは彼らの周辺に登場する

日本考古学黎明期に活躍した人々の活動を見ていくこととしよう。これらのことから、再度、関西大学博物館資料の考古学史的な位置付けを明確にすることができれば幸いである。

日本考古学の黎明期には、二人の外国人の活躍があった。一人はE・S・モースであり、もう一人が今回取り上げるH・V・シーボルトである。前者が、今日出版されている考古学の概説書、あるいは中学、高校の教科書にさえ登場するのに対し、後者の日本考古学における足跡は、ほとんど顧みられることがないのが現状である。

さて、日本の考古学において明治一〇年（一八七七）という年は、極めて重要な年として記憶されている。その第一の理由としてE・S・モースによる大森貝塚の発掘があげられる。この発掘については、佐原真氏を筆頭に多くの方が経緯、調査地点、報告書などについて詳述しているので、今回は省略する。^③

ただ、この大森貝塚と神田孝平との関連だけを紹介しておく。大森貝塚の出土品は、明治一〇年二月二〇日明治天皇の御覧に供せられた。^④この際の上申書が、先日重要文化財の指定を受けた『公文録』に収録されている。その全文を左に掲載する。^⑤

「府下大森村ニ於テ發見ノ古物供 天覽度該品九函并目錄筆記共二
通呈進候條該品九函ハ経覽後御回下相成候様致度此段上申候也

文部大輔 田中不二磨代理

文部少輔 神田孝平

明治十年十二月十四日

太政大臣 三條 實美 殿

この上申書にあるようにこの時、神田孝平は大輔田中不二磨の代理を務めており、さらに文部卿も不在であったことから、実質文部行政のトップに立っていた時期である。よって、大森貝塚の出土品を明治天皇の御覽に供するというアイデア自体、神田孝平の発案であったのかもしれない。また、天覽の際における説明資料ともいべき『大森村古物發見ノ概記』も文部大輔田中不二磨の名によって書かれているものの、神田孝平が深く関与したと考える方が自然である。よってこの『概記』に記されている考古学への理解は、神田孝平の考古学に対する姿勢であるといつて差し支えないものと思われる。

また、『概記』の記述にある、大学には博物館が必要である旨は、アメリカ合衆国の教育事情を視察した田中不二磨の考えが反映されているものであろう。さらに想像を逞しくすれば、明治天皇への天覽は、考古学の隆盛を目指したものであることのみならず、考古学と同じく揺籃期にあった博物館(局)の活動を軌道に乗せようという思惑も読みとれるように思われる。

もう一つ明治一〇年の出来事として、柴田承桂訳による『古物学』の出版をあげておきたい。この『古物学』は文部省が刊行した『百科全書』

の一冊として出版されたものである。柴田承桂及び『古物学』については、角田文衛氏が紹介しており^⑥、また原本については渡辺兼庸氏が明らかにしている^⑦。それによると原本は『Chamberss Information for the People』の第四版であるという。内容は主に欧米考古学の概説書であり、当時の日本人がどの程度理解し得たかは不明である。実際のところは、西洋から導入した知識の一つに、たまたま考古学があったというものであろう。注目したい点は、本書の冒頭に「アルケオロジー 古物学ト云ヘル語ハ其原意十分明確ニシテ・・・(後略)」とあり、「Archaeology」を古物学と翻訳していることがわかる。「Archaeology」に「考古学」という訳語を与える経緯は金関恕氏^⑧、あるいは「考古学」の初見をめぐっては佐原真氏、邊見端氏それぞれの意見がある^⑨。いずれにせよ、江戸時代の「好古学」から人文科学としての「考古学」へ進化するためには、西洋からの知識導入が必要であったことは間違いない。明治一〇年出版された『古物学』が、今日隆盛を迎えている日本考古学の、第一歩に位置付けられるべきものであることを知っておく必要はある。

明治一〇年の事項を二点示したが、この前後の「考古学」をめぐる状況については、考古学史の大家清野謙次氏、斎藤忠氏らの著作に詳しい^⑩。また、E・S・モースとはほぼ同時期の外国人考古学者の活躍については、岡田宏明・工藤雅樹氏らの論考がある^⑪。

以上、明治初期における、考古学黎明期の状況を概観した。このような中で、H・V・シーボルトの足跡をたどっていくことにしよう。

二 H・V・シーボルトの略歴

本章では、H・V・シーボルトの略歴を簡単に記述しておく。彼の正式な名前は「Heinrich Philipp von Siebold」と表記される。「Heinrich」の日本語表記は、「ハインリッヒ」あるいは「ヘンリー」の二通りが認められる。どちらの発音が当時一般的であったかについては推測の域をでないが、後述するH・V・シーボルトが主催した「古物会」のパンフレットには「ヘンリー」と記述してあることからすると、当時の日本人にとっては、英語読みに則って表記することが一般的であったのかもしれない。また、父F・V・シーボルトを「大シーボルト」と呼び、H・V・シーボルトは「小シーボルト」と表記されることも多い。

このH・V・シーボルトの略歴については、ハンス・ケルナー氏、クライナー・ヨーゼフ氏と、子孫にあたる関口忠志氏の研究成果を参照しながら、記述を進めていくこととする。²³⁾

H・V・シーボルトは、嘉永五年（一八五二）ドイツにてF・V・シーボルトの次男として誕生している。この時父は五六歳であり、一般にいうシーボルト事件によって国外追放をうけた後、大著『NIPPON』を刊行中のことである。H・V・シーボルトは、父から日本の歴史、風俗を子守歌代わりに聞かされていたに違いない。前稿で紹介したように『NIPPON』には、考古学的な記述も多く、奈良県島の山古墳出土の鍬形石も掲載されている。父は安政六年（一八五九）に長男A・V・シーボルトとともに再来日を果たす。その後、父は文久三年（一八六三）に帰国し、慶應二年（一八六六）に七〇歳で死去する。

その時、H・V・シーボルトは一四歳であった。翌年には一人日本に残っていた兄が徳川昭武の通訳として帰国し、この際H・V・シーボルトは、徳川昭武の従者から日本語の教授をうけている。このような環境にあつて、H・V・シーボルトは明治二年（一八六九）に兄と共にサンフランシスコ経由でついに日本の土を踏む。この時一七歳であり、高校を中退したことが後々まで彼の就職、昇進を阻むこととなったとされる。来日直後の、彼の行動は明らかではない。おそらく兄とともに修好通商航海条約の締結を手伝い、日本語の修練を重ねていったであろう。さらには父から聞かされていた日本の文化を実体験し、吸収していったことも想像に難くない。

このような暮らしの中、明治五年（一八七二）には、在日オーストリア・ハンガリー公使館臨時通訳見習いとなる。この官職を得たことによつて、ウィーン万国博覧会準備委員会から、日本政府の連絡要員として起用される。彼の仕事は、何が日本を代表する文化として出陳すべきものであるかを選定する作業であり、この業務を通じて蛭川式胤ら文化財行政の黎明期に活躍した日本人との交流を結んでいくこととなる。

さらには同年、古物商とのつきあいの中で古美術を扱っていた商家の娘、岩本はなと結婚をする。日本人を妻とし、蛭川との交流を深めていきながら、万博への出陳物を選定していく作業は、H・V・シーボルトにとつて充実した毎日であつたと思われる。蛭川らから、日本の古典籍についての知識を吸収したことが、後述するように、彼の著作に反映されている。同時にこの周辺にいた人々から日本の遺跡、考古遺物の知識も吸収したことであろう。

明治六年（一八七三）に、展示品と共にウィーンにわたったH・V・シーボルトは、デンマーク国立博物館館長ヴォーソーとの交流（文通）において、考古学の知識を深めていく。また、博物館に日本の石器を寄贈し、このことよってダネグロップ勳章騎士十字賞を受ける。これ以降彼は、ヨーロッパ各地の博物館、貴族に日本の文物を寄贈し、数多くの勳章を受けることとなる。この一六年後の明治二年（一八八九）、ウィーン帝立王立宮廷博物館に日本民俗コレクションを寄贈し、外交に関する業務の評価も併せてであろうが、明治四年（一八九二）に男爵の位を授与されている。

さて、ウィーンから明治七年（一八七四）六月に再度来日し、それからの五年間ほどが彼の日本考古学において最も活躍した時期である。逆にいえば、この五年間のみに限られる。彼の考古学活動の一端を見ながら、日本考古学黎明期の状況をもう少し見ていくこととしよう。

三 H・V・シーボルトの考古学活動 — 「古物会」の開催 —

H・V・シーボルトの考古学的な活動については、先述したハンス・ケルナー氏、クライナー・ヨーゼフ氏の著作にも詳しく述べられている。日本人では高瀬重雄氏を嚆矢とし、関俊彦氏、佐原真氏らが、H・V・シーボルトの復権をかけて、彼の業績を再発掘している。特に、佐原氏はH・V・シーボルトが海外の雑誌に投稿した論文についても丁寧で紹介しており、とても筆者の及ぶところではない。

そこで小稿では、H・V・シーボルトの考古学活動の一端として、彼

の主催した「古物会」を見ながら、彼の交友関係等を見ていくこととしたい。

図版1に示した「廣告」と題されたパンフレットが、先頃東京で開催された展覧会に出陳された^⑧。まず、写りもよくないため、この内容を左記に記述しておく。

「廣告

知識を廣むるには古今の物品を探ぬるにしかず茲に予が性古代物品を愛玩するを好み数年輯蔵する品少しとせず故に今回諸友と謀り一筵を弊屋に開き古今物品を陳列し是を同好諸君に質し各其意見説論を聞き相俱に知學の一助とせんとす幸ひ庭中の樹々も紅を催し富士の嶺も白を戴き品川沖には小春の萍日和に漁する舟も手にとる如見え眺望も亦一興なれば各君一物を御携へ且御遠慮なく御知己御誘ひ本日御來臨御衆評あらん事を希望す

第七大區五小區区上大崎村四十七番地

元松平主殿頭邸にて

會主

ヘンリー ホン シイボルト

補助 蜷川 胤式ムサシ 古筆 了仲 西村 詰叟

松浦馬雨齋 樋口 趨古 横山 月舎

玉川 齋 柏木 探古 愛古堂磐翁

栗本 鋤雲 金澤 蒼夫

十二月六日早天より開筵

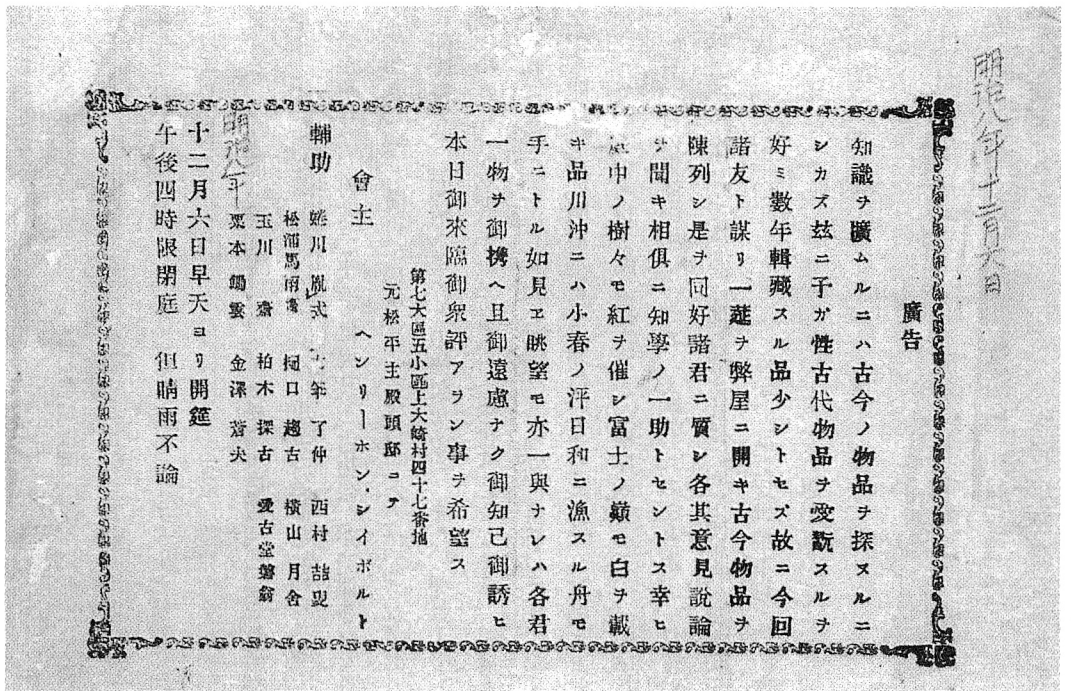
午後四時限閉庭 但晴雨不論

この広告文を見ながら、H・V・シーボルトの考古学活動を明らかにしていこう。まず、本文の「・・・古今物品を陳列し是を同好諸君に質し各其意見説論を聞き相俱に知學の一助とせんとす・・・」に注目したい。内容については改めて説明するまでもないが、自らの所蔵品と、個々に所蔵する遺物を持ち寄って展覧し、意見の交換をすることによって、遺物に対する知識を深めていこうというものである。

このような趣旨で行われる「古物会」は、江戸時代中期に本草学の台頭とともに始まった「物産会」を起源としていっていると考えて間違いない。特に今日でいう考古遺物を含む「石」については、木内石亭や木村兼華堂が「奇石会」あるいは「弄石会」などと称して、互いの所蔵品を持ち寄り、議論を交わした活動を主催している。この会の主旨は、木内自身が「珍しいものを収集することが目的ではなく、互いに知識を高めることである」と述べており、H・V・シーボルトの「古物会」の目的と相通じるものがある。

次に開催された場所であるが、「廣告」には「第七大區五小區上大崎村四十七番地 元松平主殿頭邸」とある。この住所からすると現在の山手線目黒駅付近であり、住居表示では品川区上大崎二丁目に該当すると思われる。安政三年（一八五六）の地図を見ると、この住所には「肥前島原藩主松平主殿頭忠精 七万石」の広大な抱屋敷が表示されており、この地の一画が「元松平主殿頭邸」と考えて間違いないであろう。

この松平主殿頭の家系は、家康の先祖松平信光の七男忠定を祖とする。明治維新を迎えた時の当主は、忠精から三代後の忠和である。忠和は水戸藩主徳川斉昭の一六男として生まれており、すなわち徳川慶喜の実弟

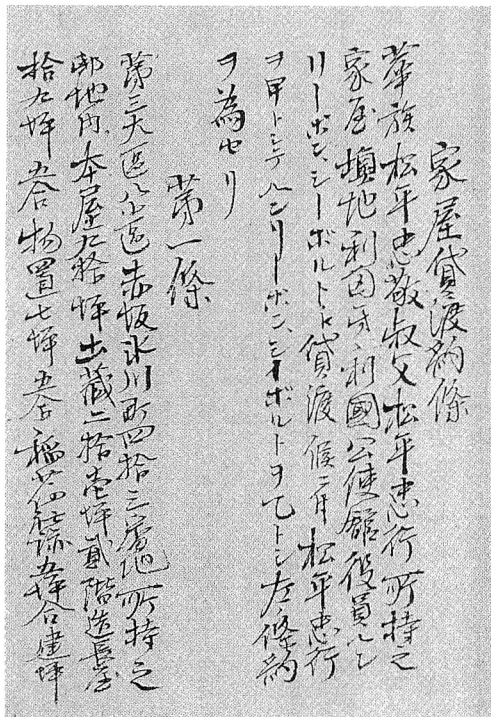


図版1 H・V・シーボルトが主催した古物会の「廣告」(⑭より)

に当たる。文久二年（一八六二）に忠愛の養子として跡を継ぎ、島原藩主となり、明治維新後島原藩知事を務めた人物である。

H・V・シーボルトの居住地については、明治一〇年一二月に松平忠行との間で、住居の賃貸契約を結んでいることが知られている（図版2^⑧）。その屋敷の住所は「赤坂水川町四三番地」であり、現在の住居表示では「港区赤坂六丁目」に該当し、氷川神社近くに位置する、現在日本銀行氷川寮の敷地内であると考えられる。この転居の契機は、前年明治九年一月二十九日に、この時にオーストリア公使の不在のため居住していた築地居留地で、火災の被害にあったことであろうと想像できる。この火災によって所蔵古器物・書物、あるいは原稿の草稿なども灰燼に帰したと伝えられている。

さて、家主松平忠行の家系は、奥平信昌の四男である忠明を祖とする^⑨。



図版2 H・V・シーボルトの「家屋貸渡約條」(17より)

明治維新を迎えた時の当主は忠行の長兄忠誠であり、現在の埼玉県に含まれる忍藩主を務めている。この忠誠は明治二年に死去しており、その養子忠敬が同年家督を継ぎ、忍藩知事となっている。忠行はその明治二年生まれであり、明治一〇年にH・V・シーボルトと賃貸契約を結ぶことは難しいものと思われ、実質にはこの忠敬が後見役を務めていた可能性が高い。実際、契約書にも「華族松平忠敬叔父松平忠行所持之家屋敷地・・・（後略）」と記されており、忠敬の名前が認められる。

話がそれが再度「廣告」に戻り、「古物会」が開催された日時を確認しておきたい。「廣告」には「二月六日」とだけ記されており、その上に鉛筆書きで「明治八年」との注記がある。また、図版1でもわかるように枠外に「明治八年二月六日」の書き込みがある。筆跡から見て同一人物によって記入されたと判断できるが、詳細は不明である。しかしながら開催年が「明治八年」で間違いのないことは、「補助」として名前が挙がっている柏木貨一郎（探古）から根岸武香あての「明治八年二月一日」付の書簡の中に、この「古物会」のことが記されていることから傍証することができる^⑩。清野謙次氏は「明治四年」、関俊彦氏、関口忠志氏は「明治一〇年」としているが、清野氏は柏木貨一郎の書簡を引用していることから、単純な勘違いであると思われる。また、関・関口両氏のいう「明治一〇年」説は、先述したようにH・V・シーボルトが転居している事実から否定できると考えている。

以上のようにH・V・シーボルトの「古物会」は、明治八年（一八七五）二月六日、現在の品川区上大崎二丁目にあった元松平主殿頭の屋敷地で開催されたことがわかる。この地は広告文にもあるように、うっ

すらと雪化粧をした富士山を望むことができ、品川沖までも見晴らす景勝の地であったことが窺える。そしてこの時、H・V・シーボルトは二三歳の青年である。

続いて「補助」として名前の挙がっている一人名を見ながら、H・V・シーボルトの交友関係、あるいは「古物会」の意義などを見ていこう。

まず、筆頭に名前の挙がっている「蜷川胤式」であるが、「蜷川式胤」の誤植であることは明白である。H・V・シーボルトと蜷川の交友関係は、ウィーン万国博覧会に関係したことから始まり、その成功と共に一層深まっていったものと考えられる。蜷川が、わが国博物館の礎を作った一人であることは誰もが認めるところであろうが、そこにはH・V・シーボルトとの交流も反映したのではなからうか。

その他、管見で知るところの人物としては「古筆了仲」・「松浦馬雨齋」||「松浦武四郎」・「横山月舎」||「横山由清」・「柏木探古」||「柏木貨一郎」・「愛古堂磐翁」・「栗本鋤雲」らがいる。以下、各人物像を簡単に紹介しておこう。なお、数名が不明であり、このほかに判明する人物がいたらご教示を願いたい。

古筆は、古筆鑑定を家業とする「古筆了佐」を祖とする家系の分家筋に連なる人物である。

松浦は、文政元年（一八一八）に生まれており、この時五八歳である。蝦夷地の探検家としての方が著名であるが、考古学的な著作としては『撥雲余興』がよく知られている。「馬角齋」とも名乗ったようであるので、「馬雨齋」は誤植なのかもしれない。

横山は、文政九年（一八二六）生まれの五〇歳である。そしてこの時は元老院少書記官として勤務しており、明治政府初期の高官である。国学者、法制史学者の第一人者といってもよく、また考古学的な著作としては『尚古図録』が代表作である。同じ明治政府の高官である神田孝平との交流もよく知られ、お互いの著作にそれぞれの所蔵遺物を掲載している。

柏木は先にも少し触れたが、幕末から明治にかけての古美術鑑定家・収集家として著名な人物である。明治五年（一八七二）には、町田久成・蜷川式胤らとともに正倉院・近畿地方古社寺宝物調査員となっている。また、明治五年九月に大仙古墳（仁徳天皇陵）の前方部において石室が開口したことが知られているが、この状況を描いた絵図に「柏木政矩」として名前を見ることができる。柏木が絵師としての才能を有していたものかどうかは不明であるが、正倉院・古社寺宝物調査員として関西に在任していた際に、このニュースを聞きつけて現地に向いたのではなからうか。柏木は天保二二年（一八四二）生まれであるので、「古物会」開催時は三五歳であり、このメンバーの中では若手の一人である。

愛古堂は、『愛古堂漫稿』（明治七年刊）の著書名から、大槻磐溪であろうと推測する。「磐翁」とも名乗ったようでもある。大槻は蘭医学者として著名な大槻玄沢の次男として享和元年（一八〇二）に生まれており、「古物会」の際には七五歳であり、長老格といえよう。

栗本は文政五年（一八二二）生まれの五四歳にして、旧幕府の役人を務めていたが、この時には報知新聞の記者をしていた人物である。

この栗本とH・V・シーボルトの交友関係が、椎名仙卓氏によって明

らかにされているので紹介しておこう。それは明治八年九月二十九日付の『郵便報知新聞』に掲載された「博物館論」という記事である。その前文は栗本が書いており、記事の中にH・V・シーボルトと友人であり、

H・V・シーボルトが「博物館は人民のために利益がある」としきりに述べているので、聞くままにまとめたというものである。この日付はまさに「古物会」が開催される二ヶ月間ほど前のことであり、H・V・シーボルトが博物館の機能を十分承知した上で、「古物会」を開催していることを裏付けるものであろう。このH・V・シーボルトの記事がどの程度益したかは不明であるが、明治八年には現在の東京国立博物館の前身として「内務省博物館」、国立科学博物館の前身として「東京博物館」が誕生している。

先のH・V・シーボルトが火災を受けたという記事も同じ『郵便報知新聞』の明治九年一月一日付に掲載されており、この記事も栗本の手によるものであろう。

さて、H・V・シーボルトの開催した「古物会」の状況も、この『郵便報知新聞』によって知ることができる。H・V・シーボルトは、翌明治九年の四月三〇日にも同様の「古物会」を開催しており、その開催記事を左記に抜粋しておく。

「澳國公使館附シーボルト氏が昨日目黒行人坂にて催せし博覧会は諸方より古瓦古鏡古銅古叢書玉石等珍奇の古物を出品し中々一目では見盡されず……(中略)……松浦武四郎寄贈せし古代の土器二種武州大谷村榎本太郎所持地の塚山より当一月中掘出せし石棺中に在りたる銀の

耳環なり……(中略)……当所は庭前より遠く山水を望み最も風景に富む地なれば伊藤君松方君鳥尾君を初め其外好事官員華族も大勢車を駐められ席上で行厨を開かれし人もありたり」

この記事も栗本が書いたものであろうと想定でき、それゆえ「古物会」の状況がよく伝わってくる。開催場所は「目黒行人坂」とあることから、前年と同様「元松平主殿頭邸」で開催されたものであり、文中の「伊藤君」以下は伊藤博文、松方正義、鳥尾小弥太である。時の政府高官や華族が見学にきており、かなり賑やかだったものであることが窺える。

この「古物会」の様子からも、「補助」として名前が挙がっている一人をはじめとし、H・V・シーボルトの周辺には、多士済々の人物が集まっていたことがわかる。いずれもこの当時、いわゆる「古物学」「博物学」の推進者であり、官民の違いはあるが、明治初期の文化財行政をリードした人々である。彼らのいわば「古物学ネットワーク」を駆使することによって、様々な情報がH・V・シーボルトの元には集まったであろう。

以上、H・V・シーボルトの開催した「古物会」の状況を見てきた。この「古物会」は明治初期にあつて、まさに江戸時代からの流れをくむ「物産会」から、博物館活動としての「展覧会」への過渡期にあるといつてよい。一八世紀中頃から木内石亭・木村兼華堂ら弄石家が、それぞれ所蔵品を持ち寄ったり、あるいは卷子本にまとめたりしながら、意見交換をし「好古学」の知識を高めてきた。この活動は津島如蘭・平賀源内らが会主となって開催した「物産会」に影響を受けたものであることは間違いない。石亭らの考古学的な活動は、佐原真氏の指摘したように

「almost Archaeology」あるいは清野謙次が使用した「旧考古学」として位置付けられている。

H・V・シーボルトの「古物会」は、開催の趣旨は「物産会」と相通じるものであるが、H・V・シーボルト自身「博物館」の必要性を新聞紙上で説いているように、欧米の博物館活動を見据えたものであると見てよからう。また、考古学の観点からも、欧米の考古学に通じたH・V・シーボルトから知識を取り入れることによって、「旧考古学」から今日の「考古学」へ脱皮していく姿として位置付けられる。

ただし、H・V・シーボルトの「古物会」は、会期が一日であること、個人の屋敷で開催されている点などは江戸時代的であるといえる。明治中頃までは、この種の「古物会」「本草会」等が盛んに開催されており、その性格が「見せ物」的であり、娯楽的な要素が強いことも事実である。それゆえ博物館活動が近代的な「博物館」としてわが国に定着するまでには、後もう一步のところにあるといえよう。佐原氏の言葉を倣るならば「almost Museum」とでも表現できるのではなからうか。

四 H・V・シーボルトの著作『日本考古学覚書』について

[Notes on Japanese Archaeology – with Especial Reference to the stone Age –]

前章においてH・V・シーボルトの開催した「古物会」を通じて、彼の考古学活動を見てきた。本章では彼の著作物に焦点を当てていくこととしたい。

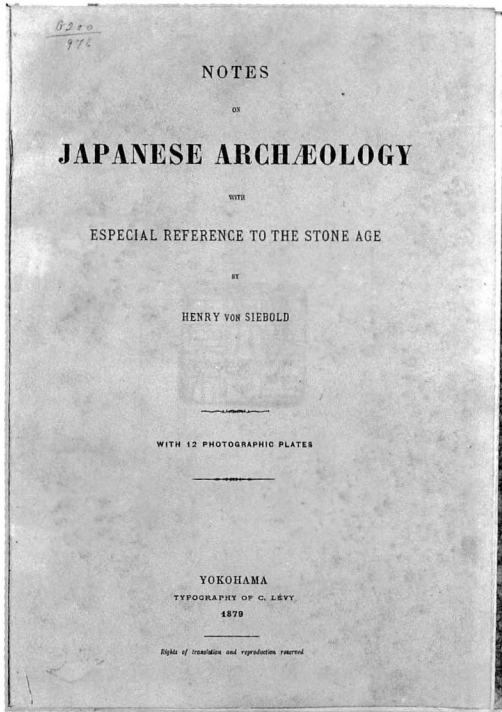
H・V・シーボルトの著作としては『考古学略』と『Notes on Japanese

Archaeology – with Especial Reference to the stone Age –]の二冊がある。今回取り上げるのは後者であるが、これまでの訳名に従い、以下「日本考古学覚書」と記述していきたい。その他、欧米の雑誌に投稿されたものがあることは佐原氏の紹介した通りであるが、原物を確認することが難しいため触れられないことを断っておく。

さて『考古学略』は、明治一二年（一八七九）六月に刊行されたものであるが、彼の著作としては『日本考古学覚書』よりもはるかに知名度が高い。その理由としては、まず日本語で書かれていることが第一の理由に挙げられよう。さらには、刊本として出版されており、『日本考古学覚書』よりも多量に刊行されたことも大きな要因と思われる。

本書は、斎藤忠・伊藤玄三両氏をはじめ、多くの諸先学が紹介している。⁸ よって簡単に紹介するにとどめるが、内容の大半はヨーロッパにおける考古学の解説で占められている。内容については、佐原氏が指摘するように、使用されている挿図から判断して、ラボック著『先史時代』第二版を参考にして執筆されたものとされている。そのためどこまでがH・V・シーボルトの記述であるのか判断とせず、また、訳者として吉田正春（ともに外交官としての交流があったものか）の名が挙がっているが、口述筆記をしたものなのか、元原稿があるのかも不明である。

本書の執筆動機としては、欧州において学問の一つとして確立している「考古学」を、まずそのなんたるかを日本に紹介することであったのではなからうか。それゆえ日本語で記述し、読者への便を図ったと考えられる。結果的には清野謙次氏が指摘したように、日本の考古学についての記述が少なく、やっと誕生しかかっていたわが国の考古学萌芽期に



図版3 H・V・シーボルト著
『JAPANESE ARCHAEOLOGY』表紙

は、時期尚早の感が拭えないものであった。²⁾しかしながら、近隣諸国との比較などが必要であることなど、日本考古学が歩む道を的確に指摘していることは見逃せない事実である。

続いて『日本考古学覚書』（副題「特に石器時代に関連して」）を見ていきたい（図版3）。本書は極めて貴重書であり、国内に現存するものとしては数冊ではなからうか。以下、東京大学総合図書館所蔵本（蔵書番号G200.976）に基づいて記述を進めていく。³⁾

天地三四・〇センチ、左右二四・〇センチを測り、序文三頁、本文一八頁、図版解説四頁と図版一二葉からなる。図版は一枚一枚紙焼きされたものがそのまま添付しており、本書の発行部数が少ないことを物語る。

発行年月日は『考古説略』と同じく明治一二年（一八七九）であり、H・V・シーボルトが二七歳の時である。なお、著者名は「HENRY VON SIEBOLD」と英語表記である。

この東京大学所蔵本の裏表紙には、この図書の来歴が次のように記されている。

「EXLIBRIS Edward S. Morse(1838-1925) professor of Biology Tokyo
Imperial University(1877-1879) Given by his will By his daughter
Mrs. Edith Morss Robb」

すなわち、本書は関東大震災の後に、E・S・モースの意志によって、彼の娘から寄贈されたものであることがわかる。後述するようにE・S・モースとH・V・シーボルトはライバル関係にあり、本書についてもE・S・モースは辛辣な批評を述べている。⁴⁾それゆえ本書をシーボルトが所蔵していることは極めて自然なことであるが、彼の所蔵本が、現在日本に存在していることは、奇遇といえは奇遇である。

内容は序文から始まり、七章までの構成になっている。なお、本書は全文が関俊彦、関川雅子両氏によって翻訳されている。⁵⁾この翻訳については佐原氏の批判があるが⁶⁾、筆者は英語に堪能ではなく、佐原氏の批判の是非が判断できないため、以下の記述は関氏らの翻訳に大部分依拠していることを明記しておく。

目次は次の通りである。

序文 Introduction

第一章 Stone Implements and Stone Weapons (石器と石製武器)

第二章 Japanese Graves (日本の墓)

第三章 Japanese Caves (日本の洞穴)

第四章 Japanese Ancient Pottery (日本の古代土器)

第五章 Japanese Shell Heaps (日本の貝塚)

第六章 Stone ornaments and Bronze Objects (石製裝飾品と青銅器)

第七章 Tsuchi Ningio or Clay Figures (土人形あるいは埴輪)

各章の内容を、概観していこう。序章では、日本人の起源論を記述する。打製石器と磨製石器の違いを、人種差として理解する。この是非はともかく、日本の考古学研究にとって周辺諸地域との比較研究の重要性を説いていることに注目したい。

次の第一章の書き出しは、「私のもっている数多くの石器……」ではじまる。このことは自らの調査体験に基づいた記述であることを強調しているといえよう。彼の観察眼は、石器研究に石材同定という視点が重要であることを指摘する。石器の名称については、『雲根志』以来の、すなわち「神代石」の名称をそのまま使用する。しかしながら弄石家の命名方法が、何ら科学的でないという指摘も忘れない。

第二章の今日という古墳の記述については、『日本書紀』『古事記』の年代観を引用する。これらの文献知識については、本章に名前が出てくる蜷川式胤らからの耳学問と、父F・V・シーボルトの著書『NIPPON』からの影響が強いものと思われる。また、自分自身の足で奈良・埼玉・群馬県古墳を踏査した成果を記述する。

第三章の洞穴の項目は、前年明治一一年四月に「吉見百穴」を見学したことが、大いに役立っているものと思われる^⑧。そして洞穴が住居ではなく、墳墓であることを記述する。

第四章では、日本の古代における土器を、現在という「縄文土器」「弥生土器」「須恵器」の三種類に分類する。もちろん細かい記述には、現在では否定すべき記述があるのだが、このような鑑識眼は「古美術」に接していたからこそ可能であったといえるのではなからうか。

第五章は貝塚の記録であるが、この中で「これから私が述べるデータは、モース教授が発掘した大森貝塚とは別のものである。」と記述する。まさしく、ライバル心むき出しという観があるが、さらにはE・S・モースのいう「食人説」を真っ向から否定する。

第六章では、後述する勾玉などの装身具類を紹介する。この章の記述にも、彼の文献的な知識が生かされている。勾玉の意味などは、『NIPPON』にある父の記述も大いに参考にしている。すなわち伊藤圭介によつてまとめられた、木内石亭の『曲玉問答』、谷川土清の『曲玉考』の内容が、根底にあるものと思われる。H・V・シーボルトが直接これらの書物に目を通していたかどうかは明らかではないが、少なくとも彼らの周辺にいた人々から知識は得ていたであろう。また、子持勾玉の用途については、『雲根志』以来、剣の飾りであるとして「石剣頭」と呼称してきたことを否定し、宗教的用具の一種であることを指摘している。

もう一点興味深い記述としては、今日という耳環の用途を、次章の人物埴輪の観察結果から、耳飾りであることを論証している点である。さらにはアイヌの人々の民俗例もその根拠にしており、自らの調査結果に裏付けられた記述であるだけに、説得力を持つものとなっている。

最終章の埴輪の記述は、『垂仁記』にある野見宿禰によつて埴輪の製作が開始されたという内容を記述する。さらに埴輪の風習は、「徐福」一行

が中国大陸から渡来してきた時にもたらされた可能性を示している。

以上、『日本考古学覚書』を概観してきた。英文で書かれており、正確なニュアンスを読みとる力量がなく、誤解があれば筆者の責任である。

この『日本考古学覚書』全編を通じての姿勢としては、自らの踏査と、実物の観察に基づいた記述であることは、首肯されよう。すなわち「自らの足で現地を調査する」、「自らの目でものを観察する」という、考古学の最も基本的な研究姿勢を貫いている点を高く評価したい。H・V・シーボルトが、どの程度日本国内を旅行したかについては、十分な検討を経ていない。しかし人種論や、耳環の使用法方法などアイヌに関する豊富な知識は、前年明治二年（一八七八）に大隈重信の依頼を受けて、北海道を探索したことに基づいていることは疑いがない。

実際の発掘調査については、どの程度実施し得たかという点には、彼のおかれた立場を勘案すると、疑問点も多い。そもそもH・V・シーボルトが記述した『調査報告』が存在していない。また、検討した遺物についても、出土地の記載が曖昧であることは、E・S・モースの批判の通りである。

いずれにせよこの著作が、彼の周りにいた人々から様々な知識（特に『記・紀』をはじめとした文献の知識）を得て出来上がっていることも疑いが無い。文中に名前が見られるのは蜷川式胤だけであるが、耳環については、先述したように明治九年四月三〇日に開催した「古物会」において「武州大谷村」出土の銀環が出品されており、この時その用途について議論したことが予想できる。同じく土器の記述も「古物会」を通じて仕入れた知識が、その基礎になっているものであろう。

この本の内容が、図書の出版に先立って『ベルリン人類学民俗学先史学会報告』等の雑誌に掲載されているものであることも、佐原氏が紹介している通りである。よって『日本考古学覚書』の刊行は、H・V・シーボルトにとつて自らの研究の集大成であったともいえよう。それゆえ英文で執筆した意義は、自らの業績を欧米で評価してほしいという発想があったとも考えられる。

日本考古学のためには、清野氏も指摘しているように、本書こそ日本語で出版されたならば、H・V・シーボルトの名は日本考古学界において、今日のように忘れられてしまうことはなかったのではなからうか。石器の産地同定、周辺諸地域との比較研究などは今日的なテーマとしても、十分必要であり、且つ重要な視点である。

このことは同時期の出版物と比較しても、『日本考古学覚書』の内容が充実していることがわかる。例えば、本書の刊行から五年後に出版された神田孝平著『日本太古石器考』は、同じ英文で執筆されているものの、内容としては『雲根志』を超えたものとは言い難い。すなわち考古学としての記述は、H・V・シーボルトの『日本考古学覚書』に軍配が上がることは明白である。

H・V・シーボルトの本心がどこにあったのか、先に述べたように欧州での評価を主眼としたものであったのかは推測の域を出ない。あるいはまず『考古説略』のような概説書を出版することによって、わが国に考古学の啓蒙活動を行った後、日本考古学の著作を日本語で出版する予定にしていたのだろうか。いずれにせよ、H・V・シーボルトの考古学的な活動は、この明治二二年を境に終了してしまっているのである。

五 『日本考古学覚書』掲載の関西大学博物館所蔵資料

『日本考古学覚書』を概観してきたが、この著作に掲載された遺物のいくつかは、関西大学博物館に所蔵されていることを確認したので紹介していきたい。

今回確認できた資料は、『日本考古学覚書』図版一一に掲載された「勾玉・子持勾玉」等の装身具類である(図版4)。その他にも図版一〇までに掲載された打製石斧、磨製石斧等の中に、関西大学博物館が所蔵する可能性のある資料は散見される。しかしながら原物との同定作業が、写真が不鮮明であることと、特徴を認識しがたいことなどから困難なため、今回は確実な同定作業を実施し得た資料だけを紹介しておきたい。

さて、この同定結果を、表1にまとめた。すなわち『日本考古学覚書』図版一一と、神田孝平著『日本太古石器考』の記述と、筆者の観察結果をまとめたものである。

ここに示した六点が、同一の遺物であることは認められよう(図版5)。個々についても少し記述しておくが、aは出土地が「琉球」であり、「琉球勾玉」と呼ばれるものである。本品については別に資料紹介を行ったが、製作時期などの詳細については不明な点が多い。⁸⁾東アジアにおける勾玉の研究においては興味深い資料であるが、詳細の検討については他日を期したい。

c・dも一応「勾玉」と呼称しておく。cは周囲に渦巻文による装飾が施されている。しかしながら神田が「土中からの出土品ではない」と

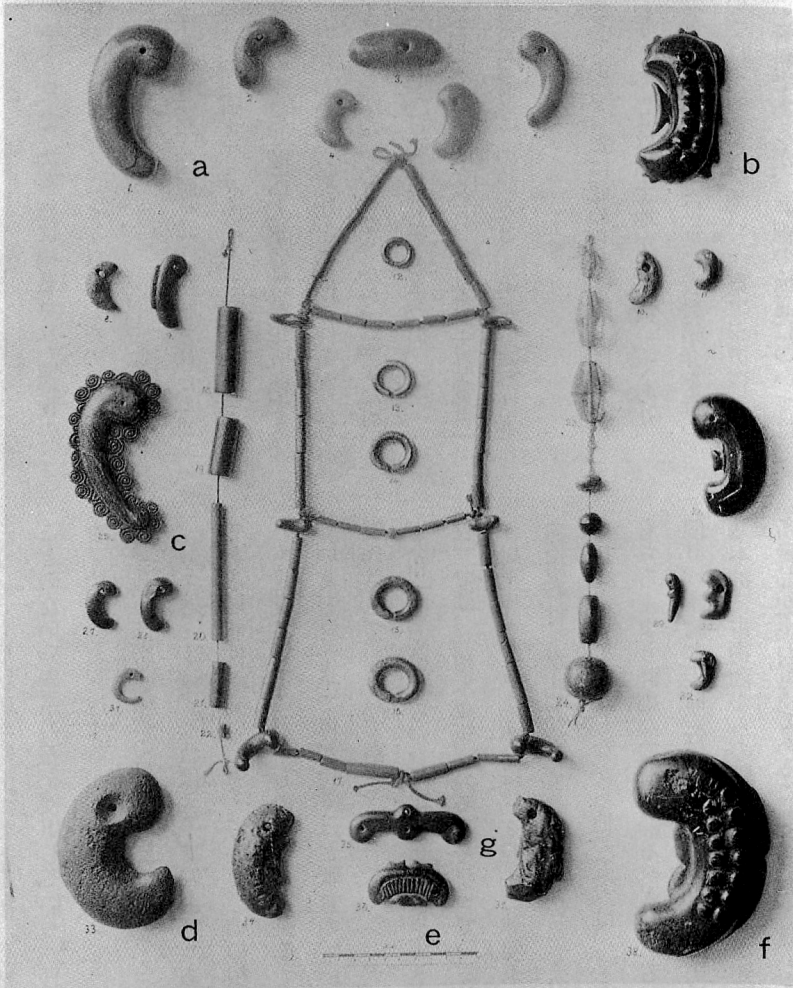
指摘しているように、発掘品ではないように思われる。管見による限りこのような装飾が施された勾玉は存在せず、偽物と考えた方がよいであろう。dも形状は「勾玉」であるが、石材は通常の勾玉には使用されることのない砂岩系の石を使用している。H・V・シーボルトは、出土地を「山城」と記述するが、神田は触れていない。本品についても、石材と穿孔方法から偽物の可能性が高いと考えている。

b・e・fは、形状は「子持勾玉」である。しかしこの三点も、偽物である可能性が高いと考えている。その根拠としては、施文方法がいずれも稚拙であること、bのように過装飾であること、さらには使用されている石材が爪で傷が付くほど軟質の、いわば「蠟石」のような石材で製作されている点である。H・V・シーボルトはe・fともに出土地を「大和」と記述するが、伝承に基づく記述であろう。なお、bは『尚古図録』では、「柏木政矩」の所蔵となっている。

以上述べてきたように、aの「琉球勾玉」については、本物との照合(使用石材・穿孔方法)等の検証が必要であり、今回真偽については断定を控えたい。しかしながら他の五点は、まず偽物と考えてよいであろう。もちろんより詳細な検討を経るべきであるが、出土状況が確認できない限り、本物との断定は困難である。神田孝平の「考古品」の入手方法は、基本的に古物商からの購入であることが知られている。よって、神田の所蔵品が玉石混淆であることは、まず疑いない。

これらの偽物が、かつて明らかにしたように鍬形石の偽物と同様の契機によって製作されたものか否かは不明である。この点を検討するには、木内石亭ら江戸時代弄石家の著作(図譜)に描かれている資料との同定

TABLE XI.



図版4 『JAPANESE ARCHAEOLOGY』 図版11

記号	『日本考古学覚書』	『太古日本石器考』	所 見
a	図版X I - 1 Magatama “curved Jewel Stone ornament Loochoo Neplirite Do in a grave; highly polished and piercd	図版X VII - 4 Large sized Magatama; commonly called “Liukiu Magatama” from its having been found there largely Nephrite	図版5 - 1 全長9.75cm最大幅5.1cm 淡緑灰色 白い斑点が所々に混じる石材 「琉球勾玉」と呼称されるもの 本物
b	図版X I - 7 Seki-Kento “sword kunb” stone ornament	図版X IV - 6 With the fin-like appendage which runs along the whole extent of the back and is perforated in two places Serpentine	図版5 - 2 全長10.2cm 最大幅6.1cm 黒色を呈する石材 側面に2個の浮文を削り出すが稚拙 『尚古図録』では 柏木政規の所蔵 偽物
c	図版X I - 25 Magatama Stone ornaments of various sizes and shapes	図版X X I - 11 Represents a Magatama ornamented all round with cloud-like carving Serpentine Note.- Very unusual in design. Probably not dug up from the earth. (Ha.)	図版5 - 3 全長11.3cm 最大幅5.9cm 緑灰色 爪で傷が付くほど軟らかい石材 滑石 周囲に渦巻文で加飾している 偽物
d	図版X I - 33 Magatama Province of Yamashiro	図版X VII - 5 Magatama Remarkable for its lack of beauty; too heavy and rough-looking for ornament	図版5 - 4 全長10.2cm 最大幅7.0cm 灰色を呈する砂岩系の石材 腹部側はやや尖るように削り出す 穿孔方法は両面から施す 偽物
e	図版X I - 36 Seki-Kento “sword kunb” ornament Province of Yamato	図版X IV - 1 very common kind Steatite	図版5 - 5 全長5.4cm 最大幅3.0cm 暗黒灰色 爪で傷が付くような、軟質の石材 断面形は四角張る 偽物
f	図版X I - 38 Magatama stone ornaments Province of Yamato Jasper	図版X V - 4 Green serpentine Very beautiful	図版5 - 6 全長13.5cm 最大幅8.6cm 緑灰色 比重の大きい石材 側面の浮文等の施文方法が極めて稚拙 偽物

表1 『日本考古学覚書』に掲載された関西大学博物館所蔵資料一覧表



1



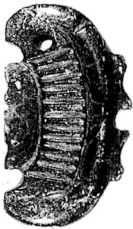
2



3



4



5



6

作業を進めていく必要がある。偽物を作る契機の一つが、一八世紀半ば頃における弄石家の収集欲にあることは間違いない。しかしながら、いつの時代であっても「収集家のいるところ、偽物作りあり」といえ、これらの偽物作りの時期、契機については、今後の課題としたい。

このように『日本考古学覚書』に掲載されており、今日関西大学博物館に所蔵されている「考古品」は、「琉球勾玉」を除いて、偽物である可能性が高い。この点では、現在の考古学における研究資料にはなり得ないものである。ただしこの点を取り上げて、H・V・シーボルトの考古学的研究価値がすべて失われるとするのは早計であろう。彼の考古学的な着眼点が、同時代の日本人考古学者よりも優れていることは先述の通りである。あえてH・V・シーボルトの研究方法に難点があるとすれば、研究資料が個人の所蔵品によるものが多く、出土地点・出土状況の明らかな資料を用いていないことであろう。換言すればE・S・モースが高く評価されている理由は、学術的な発掘調査による大森貝塚からの出土品を研究資料として、分析していることにあると考えられる。

H・V・シーボルトの扱った資料のすべてが、偽物というわけではなく、考古学的内容については、ひとまずおいておこう。H・V・シーボルトの著作は、明治一〇年代という考古学黎明期の研究状況として、認識しておきたい。

『日本考古学覚書』の図版からH・V・シーボルトの研究状況を明らかにしてきた。すなわち彼は「古物会」を開催することによって、近隣にいた人々の所蔵品を観察し（もちろん自らの所蔵品も含めて）、また、彼らとの議論を交わしていく中で、日本の考古学研究を進めていったも

のと考えられる。今回は神田孝平の旧所蔵品における探索を主眼にしたが、他にも横山由清著『尚古図録』、松浦武四郎著『撥雲余興』掲載品との照合作業を進めていくことによって、『日本考古学覚書』に掲載された資料を見つけることができる可能性は高い。ちなみに、図版4-1gは『尚古図録』の中に掲載されている。

先章で見た「廣告」の中に「補助」として名前が挙がっている人物が、H・V・シーボルトの周辺にいたことは間違いない。その中で神田孝平の名前が脱落していることが疑問であった。しかし神田孝平の履歴を見ると、彼は明治四年（一八七二）一月二〇日に兵庫県令に任官しており、その任期は明治九年（一八七六）九月三日までである³⁴。すなわちH・V・シーボルトが「古物会」を開催した明治八年二月六日、明治九年四月三〇日とも東京を離れており、このことが「廣告」に名前が挙がっていない理由であろうと推測する。

H・V・シーボルトと神田孝平の直接の交流資（史料）、例えば書簡などは見出せていない。また、H・V・シーボルトの著作にも、神田孝平の名前は記されていない。しかし『日本考古学覚書』の図版に神田所蔵資料が掲載されている以上、二人が考古学を研究する仲間として接触を持っていたことは間違いないであろう。冒頭で述べたように神田孝平は兵庫県から帰京後、大森貝塚出土品の天覧において、文部少輔として深く関わっている。

この二人が、黎明期にあった日本考古学研究の大きな推進力であったことは、疑いのない事実である。そして彼らが手にとって議論を交わしたであろう遺物（ただし偽物の可能性が高いのであるが）が、現在関西

大学博物館に存在している事実を指摘しておくものである。

六 おわりに

H・V・シーボルトは『日本考古学覚書』を刊行した明治二二年を境に、考古学に関する活動をぶつりとやめてしまったことがすでに指摘されている。この理由は、どこにあったのであろうか。佐原氏はE・S・モースとの間で起きた、大森貝塚の発掘調査先陣争いに敗れたことをその大きな理由としている。佐原氏の指摘通り、両者はそれぞれの著作の中で互いに、学術的な論争だけでない「批判」を行っている部分があり、佐原氏は欧、米の人種の違いから来るライバル心が根底にあるのではないかという指摘もする。

この二人が互いを意識していたことは間違いなく、直接の交流はほとんど見られない。東京でも、そして同時期に旅した北海道でも、実に奇妙にすれ違っている。しかし彼らの周りにいた日本人はかなり重複していたものと思われ、蜷川式胤の名は両者の著書に見られる。また、E・S・モースが『日本考古学覚書』を所持していたことは、前述の通りである。

しかしながらH・V・シーボルトが考古学に興味を失った理由が、本当にE・S・モースとの関係のみに帰結できるのであろうか。E・S・モースは明治一〇年（一八七七）に来日し、途中五ヶ月ほどの一時帰国を挟み、明治一二年（一八七九）八月には帰国する。実質一年半ほどしか滞在していない。それゆえH・V・シーボルトが考古学の研究を続け

る意志さえあれば、明治二二年以後も、すでに帰国してしまったE・S・モースにそれほど拘泥する必要はなかったと推測できないであろうか。H・V・シーボルトの方がE・S・モースより上手に日本語を操り、地理に詳しく、より多くの日本人と交友関係を持っていたことは疑いない。さらにはH・V・シーボルトが必ずしも、E・S・モースに対して敗北感を抱いていた証拠もない。『日本考古学覚書』以後に執筆されたアイヌに関する論文においても、自説である日本人種論を撤回するどころか、より確信を深めている。すなわちE・S・モースより自説が正しいことを述べている。このような事実から、H・V・シーボルトが考古学に対する興味を失った理由を、E・S・モースの存在だけに求めるべきではないと考える。

それでは他に理由を求めることは可能であろうか。まず考えられることは、彼の本務が多忙になってきたことである。明治一六年（一八八三）には、公使館主任事務官に任官している。また、明治二〇年（一八八七）からの二年間は代理公使を務めている。この時期わが国の政治的な最大の課題が条約改正であり、この業務に時間をとられたことが一因であると考えられる。しかしながらH・V・シーボルトが、公務を理由に日本への興味を失った形跡は認められない。それどころか日本の民族・民俗資料収集は、より広範囲な分野に及んでいる。

それゆえ他に理由を求めるとすれば、そもそもH・V・シーボルトの、日本に対する興味の根源は何かを問う必要があると考える。すなわち彼の日本に対する研究の原動力は、「考古学」にあったのではなく、父F・V・シーボルトが著した『NIPPON』をより詳細なものへ発展させること

ではなかったかと考えるものである。その根拠は、彼が明治二十九年（一八九六）に帰国後、まず最初に取りかかった仕事は、『NIPPON』の再版と完結であった。彼はこの作業のために、一年間の休暇を得ている。そして明治三二年（一八九八）に退職後は、ウィーンに購入した居城（フロイデンスタイン城）にて、自らのコレクション整理と、自伝の準備に没頭する。志半ばで病に倒れることになるのだが、彼は、終生日本への興味を失うことはなかったといえる。

彼の興味が、移ろい易いことは事実である。彼が日本へやってきてまず収集したものは貨幣であり、そして最初の論文は「茶道」に関するものであった。そして明治六年から明治一二年の間、最も興味を持ったことが「考古学」であったといえよう。なぜなら『NIPPON』にも、勾玉をはじめとする考古学的な記述、あるいは日本人種についての記述があり、日本への理解を深めるための一つの手段が「考古学」であったのではなからうか。

E・S・モースが佐々木忠次郎・飯島魁らの後進を育て、動物学者らしい視点から大森貝塚の報告書を出版したことによって、日本考古学の祖としての地位を、今日まで不動のものとしている。

一方で、H・V・シーボルトが著書の中で指摘した、数多くの重要な指摘は、ついに彼自身の手によってその研究が進められることなく終わった。例えば、日本考古学の理解を深めるためには、周辺諸外国との比較検討が必要だという視点が、考古学の学問的成果に取り入れられるようになったのは、ここ数十年のことではなからうか。

もし『日本考古学覚書』がもう少し後、例えば明治三〇年代に日本語

で出版されたならば、H・V・シーボルトの日本考古学における位置付けは、今日とは異なったものになっていたかもしれない。

関西大学博物館が所蔵する神田孝平コレクションは、出土地が明らかでないものが多い。これは神田の収集方法に起因する問題であり、また、真偽不詳のものが多く含まれていることも事実である。しかしながら日本考古学の黎明期に、「旧考古学」から「考古学」へ生まれ変わっていく中で関西大学博物館所蔵資料が、大きな役割を果たしたことは事実である。H・V・シーボルトが、神田孝平が、あるいは蜷川式胤がこれらの遺物を手にとり、何を議論したのであろうか。彼らの著作の中に掲載されている資料を、関西大学博物館資料の中に探し求めていく作業を続けていけば、やがてその答が見つかるものと確信している。

日本考古学の黎明期における、H・V・シーボルトとその周辺にいた人々の活動を、日本考古学史の一断面としてみてきた。彼らの活動から約一三〇年の月日が流れ、そして考古学が隆盛を迎えている今日、彼らの研究を記憶にとどめておく必要もあろう。

註

- ① 徳田誠志「関西大学博物館所蔵 旧木村兼葭堂所蔵の鍬形石―奈良県鳥羽の山古墳出土品について―」『関西大学博物館紀要』第3号 一九九七年
- 徳田誠志「神代石之図」と関西大学博物館資料―弄石家収集資料の流転―
- 『関西大学博物館紀要』第5号 一九九九年

- ② 徳田誠志「腕輪形石製品のにせもの―その存在と博物館における保管収集業務について―」『関西大学博物館紀要』第2号 一九九六年
- ③ 佐原 真「大森貝塚百年」『考古学研究』第24巻第3・4号 一九七七年
- ④ 宮内庁「明治天皇紀」第4巻 吉川弘文館 一九七〇年
- ⑤ 国立公文書館「重要文化財指定記念 明治前期の施策を伝える『公文録』展 目録」一九九八年
- 国立公文書館「公文録目録」第四 自明治九年至明治十一年 一九八一年
- ⑥ 角田文衛「柴田承桂博士と古物学」『古代学』10巻1号 古代学協会 一九六一年
- ⑦ 渡辺兼庸「『古物学』の底本」『考古学雑誌』63巻2号 日本考古学会 一九七七年
- ⑧ 金関 恕「世界の考古学と日本の考古学」『岩波講座 日本考古学 1 研究の方法』岩波書店 一九八五年
- 金関 恕「遺物の考古学、遺跡の考古学」『古事』天理大学考古学研究室第1冊 天理大学考古学研究室 一九九七年
- ⑨ 邊見 端「『訳語』考古学の成立」『日本歴史』第45号 吉川弘文館 一九八六年
- ⑩ 清野謙次「日本考古学・人類学史」岩波書店 一九五六年
- 齋藤 忠「日本考古学史」日本歴史叢書34 吉川弘文館 一九七四年
- ⑪ 岡田宏明「外国人考古学者による日本考古学の研究について」『社会人類学』Vol.2 No.1 社会人類学研究会 一九五九年
- 工藤雅樹「19世紀後半における欧米人の日本古代史研究」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻 東北歴史資料館 一九七七年
- ⑫ ハンス・ケルナー 竹内精一訳「シーボルト父子伝」創造社 一九七四年

- クライナー・ヨーゼフ「もう一人のシーボルト―日本考古学・民族文化起源論の学史から―」『思想』No.672 岩波書店 一九八〇年 のち「ハインリッヒ・フォン・シーボルト―日本考古学・民族文化起源論の学史から」と改題のうえ補筆訂正、原田信男 H・スバンシチ J・クライナー「小シーボルト蝦夷見聞記」東洋文庫597 平凡社 一九九六年 収録
- クライナー・ヨーゼフ「ハインリッヒ・フォン・シーボルト―その人と業績にまつわる資料の紹介―」『鳴滝紀要』創刊号 シーボルト記念館 一九九一年
- 関口忠志「関口家ハインリッヒ資料の研究」(1)(2)(3)『鳴滝紀要』創刊号 2号 3号シーボルト記念館 一九九一―一九九三年
- ⑬ 高瀬重雄「H・P・フォン・シーボルトとその考古説略」『越中史壇』第14号 越中史壇会 一九五八年
- 関 俊彦「ハインリッヒ・シーボルトと日本考古学」『考古学の先覚者たち』森浩一編 中央公論社 一九八五年
- 佐原 真「シーボルト父子とモリスと―日本考古学の出発―」『月刊文化財』No.250 文化庁文化財保護部 一九八四年
- 佐原 真「日本近代考古学の始まるころへモリス、シーボルト、佐々木忠二郎資料に寄せて」『共同研究 モリスと日本』守屋毅編 小学館 一九八八年
- ⑭ ドイツ―日本研究所編「シーボルト父子のみた日本 生誕200年記念」展示会図録 展示品No.695 東京都江戸博物館 一九九六年
- ⑮ 児玉幸多監修「復元・江戸情報地図」朝日新聞社 一九九四年
- ⑯ 霞会館華族家系大成編輯委員会編「平成新修旧華族家系大成」下巻 霞会館 吉川弘文館 一九九六年

17 前掲註⑭展示品No. 694

18 前掲註⑯に同じ

19 柴田常恵「雑筆六則」『東京人類学雑誌』第18巻 第20号 東京人類学会
一九〇三年

20 清野謙次『日本人種論変遷史』355頁 復刻日本考古学文献集成Ⅱ期1 斎藤忠監修 第一書房 一九八五年

関 俊彦 前掲註⑬

関口忠志 前掲註⑫

21 斎藤忠「松浦武四郎」『日本考古学史辞典』東京堂出版 一九八四年

22 大植四郎編「栗本鋤雲」『明治過去帳』〈物故人名辞典〉東京美術 一九七一年

23 椎名仙卓「ヘンリー・フォン・シーボルトの博物館論」『明治博物館事始め』思文閣出版 一九八九年

24 前掲註⑳ 132頁参照

25 斎藤忠『日本考古学資料集成』2 明治時代一 吉川弘文館 斎藤考古学研究所 一九七九年

伊藤玄三「ハインリヒ・シーボルトの『考古説略』について」『P.H. F.R. VON シーボルトと日本の近代化』法政大学第11回国際シンポジウム 法政大学 一九九二年

26 清野謙次前掲註㉑ 269頁参照

27 本書の閲覧にあたっては、東京大学史料編纂所助教田島公氏にご高配戴いた。記して感謝申し上げます次第である。

28 E・S・モース 近藤義郎・佐原真編訳「最近の出版物」『大森貝塚 付

関連資料』岩波文庫 青432-1 一九八三年

29 関 俊彦 関川雅子「先史・原史時代の日本」H・V・シーボルト著『日本考古学』―『史誌』第16号 大田区史編さん委員会編 一九八一年

30 前掲⑬ 佐原 真「日本近代考古学の始まるころへモース、シーボルト、佐々木忠二郎資料に寄せて」『共同研究 モースと日本』守屋毅編 小学館 一九八八年 260頁参照

31 金井塚良一「根岸武香と在京人類学者との交流」『吉見百穴横穴墓群の研究』校倉書房 一九七五年

32 原田信男 H・スバンシチ J・クライナー『小シーボルト蝦夷見聞記』東洋文庫 597 平凡社 一九九六年

33 徳田誠志「勾玉（琉球出土）」『関西大学博物館図録』一九九八年

34 児玉幸多他監修「明治初期中期藩府県宗治革および地方官補任表」『日本史総覧』VI近代・現代 新人物往來社 一九八四年